ＴＵＷＶＯＢ会　ＮＯ．１９　’８８．７．１

会　報　会費振込先　第一勧銀川崎支店東北大学ワンダーフォーゲルＯＢ会
普通口座　「３７０－１８８１６０４」

南極・難局・難極

野村彰夫（６期）

確かに南極を夢みたこともあった。遥か昔の話である。しかし、その後の人生は南極に近い所で仕事をしていたわけではない。今の大学（信州大学工学部情報工学科）に１１年前に移って、レーザを用いた大気環境の計測（通称、レーザレーダと言う）の研究を始めた。そんな折、１９８３年から８５年にかけての３年間、国際中層大気（高度１０－１２０　ｋｍ）観測計画の一環として南極の昭和基地でレーザレーダによる高層大気の観測を行うという話が出てきた。そこで、我々の研究グループに誰か行かないかと言うことになったが、当世、このような話に喜んでとびつく人はいないようである。そこで、「物好きな一人」として私が立候補したわけであります（ワンゲルの諸氏ならば理解していただけると思いますが・・・）。女房に「南極へ行きたいが」と伺いをたてる。冗談とたかをくくって「いいじゃないの」と乗ってきた。そこで電話をする。あっさり「内定」と決まった。かくして、第２６次南極地域観測隊の越冬隊員となったわけであります。１９８４年１１月１４日に日本を離れ、８６年３月末に帰国するまでの１６か月間の長期海外出張である。

越冬生活は２月１日から１年間、３５名の男だけの生活が営まれることとなる。ここで隊員の構成を見てみよう。平均年齢は、３２－３３歳、歴代３－４番目の高年齢とのこと。４０代が８名、３０代が１７名、２０代が１０名となっている。もう少し詳しく見ると、４０代のうち、昭和１８、１９年生れが７名、３０代では１１名が昭和２４、２５年生れと変に集中している。それぞれの世代の特徴をみてみると、４０代は、初期の南極観測の頃のことを知っているのでロマン派が多い。何故か体力がある。野球、サッカー等がうまく勝負にこだわる。マージャンは抜群にうまく年間の統計でも上位を独占（学生時代の生活がうかがえる）。３０代は、真面目でよく働く。マージャンを知らない人が意外と多い。食事の時には、かたまっておかずを争いながら食べることを好む。お酒、特にビールをよく飲む。２０代は、冷静沈着（悪く言うと、冷めている）。趣味は多種に渡り何でもよく知っている。マージャンはこの世代が下位を独占。勝負に賭ける情熱は４０代より劣る。南極へきたというより、こさせられたという感がある。　出身地別に見ると、北海道、九州、信州と言うような非都会派が多い。そこで南極では地方文化が主流となる。　血液型では、何故かＢ型が多かった（我々の隊だけのようである）。そこで、「おれが、おれが」とか「他人のことなんか気にせずにマイペース」ということとなる。日本ではこのタイプははみだされがちであるが、南極では本当に生き生きしている（だから南極に飛ばされたのだとも言われている）。

越冬生活では誰が偉いかと言うと、形式的にはもちろん越冬隊長であるが、しかし生活が厳しいことから生命へのかかわりかたが大きい隊員から偉くなるのである。そこで１番

偉いのは調理担当の隊員である。この人達には決して逆らいません。次が機械、電気を担当する隊員、次に医療、通信・・・・ときて最後に我々観測担当の隊員である。そうです、我々の仕事は失敗しても誰の命にかかわる訳でもないのですから。

食事にはまいる。日本にいてはとえも食べられないステーキが週２日程でたり、フカヒレスープやホアグラ・・・等高価なものばかりかと思うと、キャベツ、キュウリ、トマト、ナス、等の野菜類は夢にまでみる。次の隊が来るとき、第１便で何を持ってきてもらったかと言うと、それはキャベツと濁っていないビールでありました。帰国してから２か月程、肉は全く食べたくないということから、その食生活がわかると思います。　また、南極では、「食糧パニック」という恐ろしいことが起こります。「酒がなくなるらしい」と噂が出れば、加速度的にみなで酒を飲んでしまうのである。我々の時には、「インスタントラーメンパニック」が起きた。ハイペースでみなが夜食に食べてしまうので、途中で出荷停止となってしまった。こうなると大変なのである。しかし、こうなるとあらかじめ予測していたと言うより経験者から事前に情報を得ていたので、私は個人装備で段ボールで２箱インスタントラーメンを持っていったのである。ところが、これを一人でこっそり食べるのは至難の技である。お湯は皆のいる食堂にしかないこと、個室でこっそり食べようとおもっても５ｍｍのベニヤ板のみで仕切られているだけなので、頭から布団をかぶって食べても音の秘密は保たれないこと、ごみの処理に困ること等、困難が沢山あるのです。こっそり食べた事がばれると、みなの冷ややかな目線にさらされるとともに人間関係があやしくなるのである。　内陸旅行に６か月程出掛けた連中では、悲惨な「タバコパニック」が起こった。原因は明確である。禁煙をしていたメンバーが旅行の途中でそれをやめてしまったため、タバコの調達量にくるいが生じたのである。そこで彼等は、タバコが底をついてからは、紅茶の葉、インスタントコーヒ、段ボール紙等、火の付くものを片っ端からタバコがわりにしていた。ちなみに、段ボールの側面に貼ってあった紙が一番美味しかったとのことです。

帰国してから困ったことは、「南極ボケ」である。南極では、金はいらない、人の物は自分の物、自分の物は人の物とまさに原始共産社会であり、いたって平和なところである。自分の生命の維持だけ考えておけばいいのである。会議はない、書類は回ってこない、電話はかかってこない、通勤ラッシュはない等シンプルな生活パターンである。そこへきて、外の世界からの情報が入ってこない。このような状況で１年生活すると、老人性痴呆症に似た症状が現れてくる。第一には、物忘れがひどくなる。また、他人の物と自分の物の区別ができなくなる。そこにタバコがあれば、誰の物だろうと黙って吸う。そして自分のポケットに入れてしまう。他人の服や、靴など平気で履く、人の洗濯物を持っていく。これらのことを全く罪の意識なくやれるのである。また、不思議なことに、持っていかれたがわも、何も気にしないのである。さらに、金を払うという習慣を忘れてしまう。このようの人間が帰国すると回りの人にとってははなはだ都合が悪いらしい（本人は別に何とも思わないのだが）。一番あぶないのは、飲屋にいったときである。飲むと特に「南極ボケ」がでる。無銭飲食となる。しかし、タバコやライターなどを忘れる場合が多い。これも、時によっては、後でポケットのなかを見てみると増えている場合もある。トータルで帳尻があっていると思う。このような症状の中で回復したものもあるが、いまだにリハビリ中のものもある。　今後、小生と付合う事になる方があるかと思いますが、これらの点をよくご理解して頂きたく宜しくお願い申上げます。

＊＊　５３年卒同期会報告　＊＊

53年卒　川又　源一

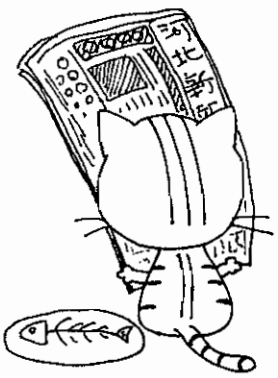
期　間　：　昭和62年９月５日～９月６日
参加者　：　川又源一（幹事）、勝力明（幹事）、石坂安雄、菊池和雄、佐藤欽一、嶋崎優人、宿崎和彦（男児２人）、高橋洋志、三輪克行
宿泊先　：　北温泉（那須町）
行　程　：　北温泉＝＝峠の茶屋－－峰の茶屋－－三斗小屋温泉－－朝日岳－－峰の茶屋－－峠の茶屋（解散）

卒業以来10年近い歳月がたったにもかかわらず、和雄のオデコ以外皆あまり変わっていませんでした。９月５日に北温泉に宿泊し、盛大な宴会を催しました。北温泉には大きな露天風呂があり、島崎が水泳用の眼鏡をして何回も往復して泳ぎ、ひなびた温泉の風情をぶちこわしてくれました。

９月６日に、和雄が直接帰ったほかは、峰の茶屋まで行きました。宿崎家の５歳と７歳の二人の息子も頑張りました。父親に激励されて登る二人の姿に目頭が熱くなりました。ここで宿崎家と島崎が帰り、残ったメンバーで三斗小屋温泉～朝日岳とまわって下山しました。三斗小屋温泉では、遠くの山並を見ながら露天風呂に入りました。

今回の同期会は参加人数９人で、今までと同程度の規模で行われました。集合地も那須で比較的集まりやすかったと思います。次回幹事の欽一と島崎に期待します。

山に行ってないというと、山に関するカットというものはさっぱり書けず、結局ネコのカットになってしまいました。隣から女房が「昔の方がうまかった」と文句をつけますが、言われてみるとそんな気もしないではなくー。
最近会社でワープロを記念クラブに配置するようになり、今、面白がっていじくり回しているところです。この手紙もワープロで打とうと思ったのですが、今のところ手で書く方が圧倒的に速いものですから手で書きます。でもそのうち、ワープロで打ったくらストが届くかもしれませんよ。



20年ほど昔のワンゲルの落書帳には、かわいいカットがいっぱい描かれていました。「山のいで湯」と題した、熊と山男が露天風呂に一緒に入っているカットが今でも懐かしく思い出されます。
河北新報の学芸部の幸英君（44年卒）は、ただいま一生懸命ワープロで『学芸通信』を作っています。読んでみたい方は本人に直接申し込んでください。

昨夏 夢にみた飲豊に挑戦、無事
走破 感無量でした。
途中長者原 実ノ小国鉱山を訪
れましたが 跡形もなく「夏草や----」
の句 ぴったりの雰囲気で ただ年月
をしみじみ感じた次第です。
小国鉱山は25年前、卒論の為
1ケ月程 滞在したところです。
昨夏体重48Kg、現在 55Kg、

関川利男（40年卒）

福井へ戻って 14年目になります
が、この商売 なかなか 福井では
仕事がなく、うち 4割方は
単身出稼ぎをやっています。
現在 大阪、某社のシステム作り。
一昨年から昨年にかけては、花の(?)
N.Y. に通算4ケ月程住んでいま
したが、相変らず英語はにがて。
言語中枢がおかしいのかも…

渡辺直人（44年卒）

近況報告

私といっしょに越冬した中に、7期の山岸正和氏の弟さん
もいました。弟さんは京大山岳部出身でした。また、もうすぐ帰国
する第29次隊に、青木君（昭52年卒）がいます。彼は、国立極地研
究所（南極観測を担当する研究所）に私が帰国した年に勤務
したようです。
我々6期は卒業から10年目に集まることにしており、昨年秋に
修善寺の温泉に15名程あつまり一泊で親交を深めありました。
次回は、10年後では、老先短いので、5年後くらいにやろう
ということになりました。

野村彰夫

東北の山はうっそうとしたブナや杉、とど松などにおおわれた自然の宝庫である。その中に毎年６県で７００㎞前後の林道が造られている。林道に限らず、各種の開発と自然破壊はいつもぶつかる大きな問題である。身近なところでは、二口林道がある。１０年以上前に子供を背負って、できて間もない林道を歩いて峠越えしたことがあったが、崩壊と改修を繰り返すだけの役立たずの道は今も変わらずということのようである。

交通路としての道のほかに、林業経営に必要な林道、過疎化対策としての林道、山岳観光道路としての林道など多くの道が山の中にはりめぐらされている。これらの道のすべてが問題だということでは決してない。しかしながら、林道の怖さは、山の実に奥深くまで入り込んでいき、自然に致命的な打撃を与えかねないということである。しかも公共事業という名のもとに。

河北新報では今年の正月から年間企画で、東北の林道に焦点を当てた特集記事を組んでいる。第一部は『荒廃の森』と題して、二口林道（宮城）、真昼岳峰越林道（岩手－秋田）黒鴨林道（山形）、青秋林道（青森－秋田）、大滝林道、粕毛林道（秋田）、川俣桧枝岐林道（栃木－福島）、ぶな森林道（秋田）、鷲川林道、今井川林道、駒ノ王子林道（秋田）手代奥山林道（山形－秋田）、旧農免林道小田越線（岩手）などの現状を報告している。第二部では『壮大な虚像』と題して、田沢スーパー林道にスポットを当て、林道開発の虚実についてレポートしている。

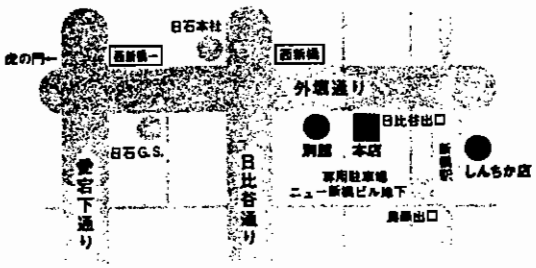
新年会のお知らせ

新年会は毎年一月の最終金曜日（来年は１月２７日）、新橋の新橋亭（しんきょうてい）本店で行っています。皆さんお誘いの上ご出席下さい。なお、６２年新年会の参加者名簿から、４７年卒の秋田修さん、仁藤祥一さん、５３年卒の石坂安雄さん、宿崎和彦さん、田沼唯士さんの５人が抜けていました。すみませんでした。

６３年新年会参加者

（Ｓ３９）岡好宗、後藤龍男、松木功
（Ｓ４０）小原佑一　（Ｓ４１）渋川尚武
横山雄一郎　（Ｓ４２）新井武、斎藤寿
桜井正久、西健、渡辺文隆　（Ｓ４３）菊谷
清　（Ｓ４４）小笠原弘三、佐藤拓哉、濱聡
三日月道夫、水上俊彦　（Ｓ４５）石野好昭
伊藤健一、富川正夫、原田博夫、桃谷尚安
（Ｓ４６）薄木三生、黒田和雄、菅原英行
野本健二　（Ｓ４７）秋田修、池田重則
仁藤祥一　（Ｓ４８）神山文範　（Ｓ５１）
堀江博　（Ｓ５８）石川勤、手塚和彦
（Ｓ５９）伊藤陽介　（Ｓ６１）山室真

中国料理 新橋亭（しんきょうてい）
本店　東京都港区新橋２－６－３　〒105
TEL (03)580－7811
年中無休　12:00P.M～9:30P.M



６２年度会計報告

収入	
繰越金	６３６，５５２
ＯＢ会費	４６，０００
新年会残金	２７，４８０
利息	１，３００
計	７１１，３３２
支出	
禄さんを囲む会開催通知	２５，３２５
会報No１８	３４，４５８
事務用品	１，８９０
計	６１，６７３
次年度繰越	６４９，６５９

☆☆　編集後記　☆☆

★会報No19とOB会名簿をお送りします。野村さんの南極の思い出話、幸英くんの懐かしいカットなど楽しんでいただけたでしょうか。
★次回には、ぜひ薄木君のケニア紀行や自然保護に関する話など聞かせてもらいたいと思います。楽しみにしてください。
★OB会名簿に勤務先を追加しました。思わぬところに先輩が、または後輩がいたことと思います。住所変更した場合は佐藤（S44年卒）まで忘れずにお知らせ下さい。
★年会費は1000円です。１ページ目の口座に振り込んで下さい。最近は新年会に参加した人から集めているだけというのが現状で、心苦しいかぎりです。
★皆さんの近況、同期会の様子、みんなに教えたいことなど何でも送ってください。
★若い人の新年会への参加を待っています。